

## 第6章 考 察

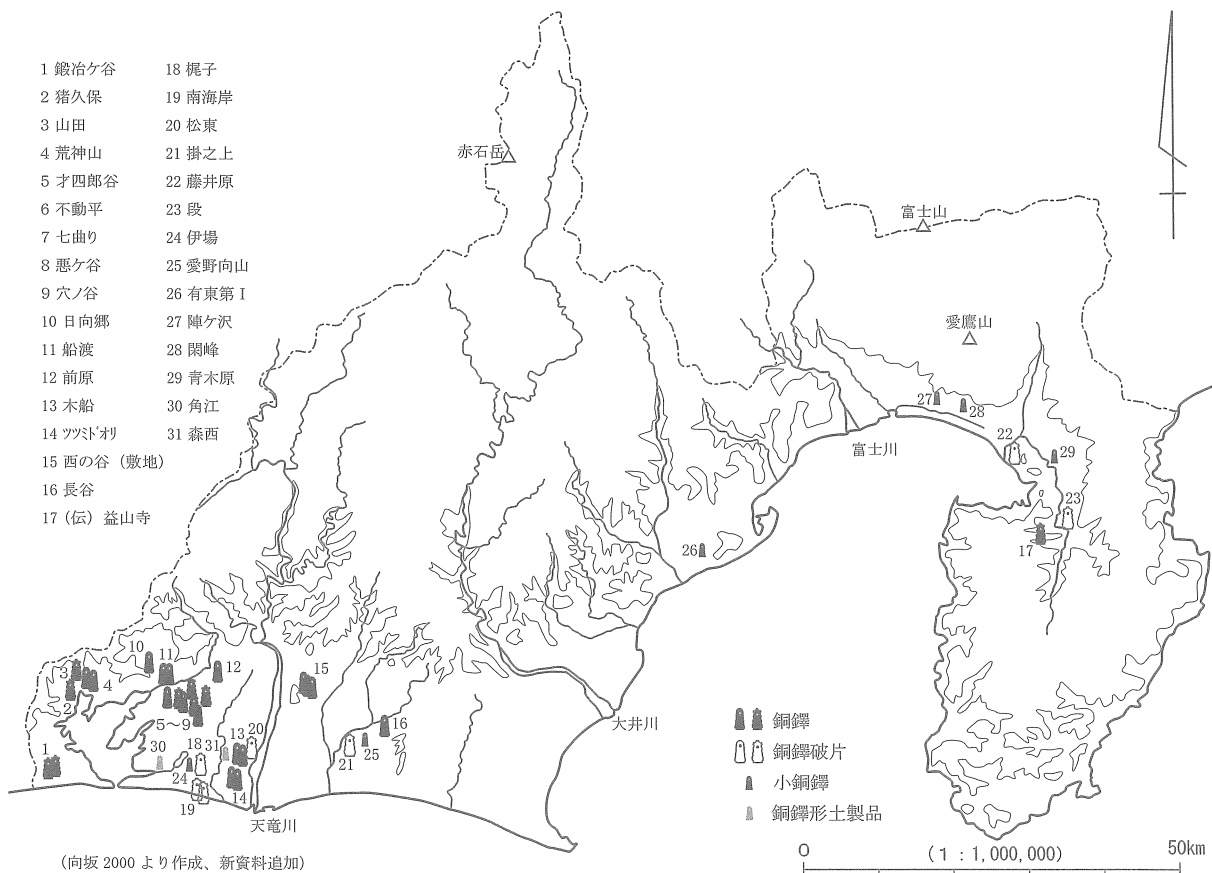
### 第1節 敷地銅鐸の埋納について

田村隆太郎

#### 1. はじめに

西の谷遺跡は、静岡県磐田市（旧豊岡村）敷地に所在する。1890（明治23）年に敷地1号銅鐸と2号銅鐸が出土した遺跡として周知されていたが、この発見は発掘調査によるものではなかった。2つの出土銅鐸は現存するが、その出土地点や出土状況については、聞き取り調査による伝承記録（梅原1927）でしか把握することができていない。伝承の信憑性はともかく、詳細は不明な部分もあった。

そうした中、2000（平成12）年に敷地3号銅鐸を発見し、発掘調査が実施された。このことは、単に3個目の敷地銅鐸が出土したというだけでなく、この遺跡が天竜川以東では稀な銅鐸埋納地であったことを証明した点で重要と評価される。さらに、銅鐸埋納状態を破壊することなく調査できた数少ない事例となった。そこで、遠江の銅鐸出土事例や全国的な銅鐸埋納の特徴をみながら、敷地銅鐸の埋納方法について検討したい。



第43図 静岡県の銅鐸分布

## 2. 遠江の埋納銅鐸出土例の概要

静岡県内出土の銅鐸関連遺物としては、銅鐸のほか銅鐸片、小銅鐸、銅鐸形土製品、舌をあげることができる。しかし、完形に近い状態の銅鐸は、ほぼ全てが遠江に確認でき、とくに天竜川以西に多い(島根県教育委員会ほか2002など、第43図)。そして、その全てが埋納されたと判断もしくは推測されるものである。

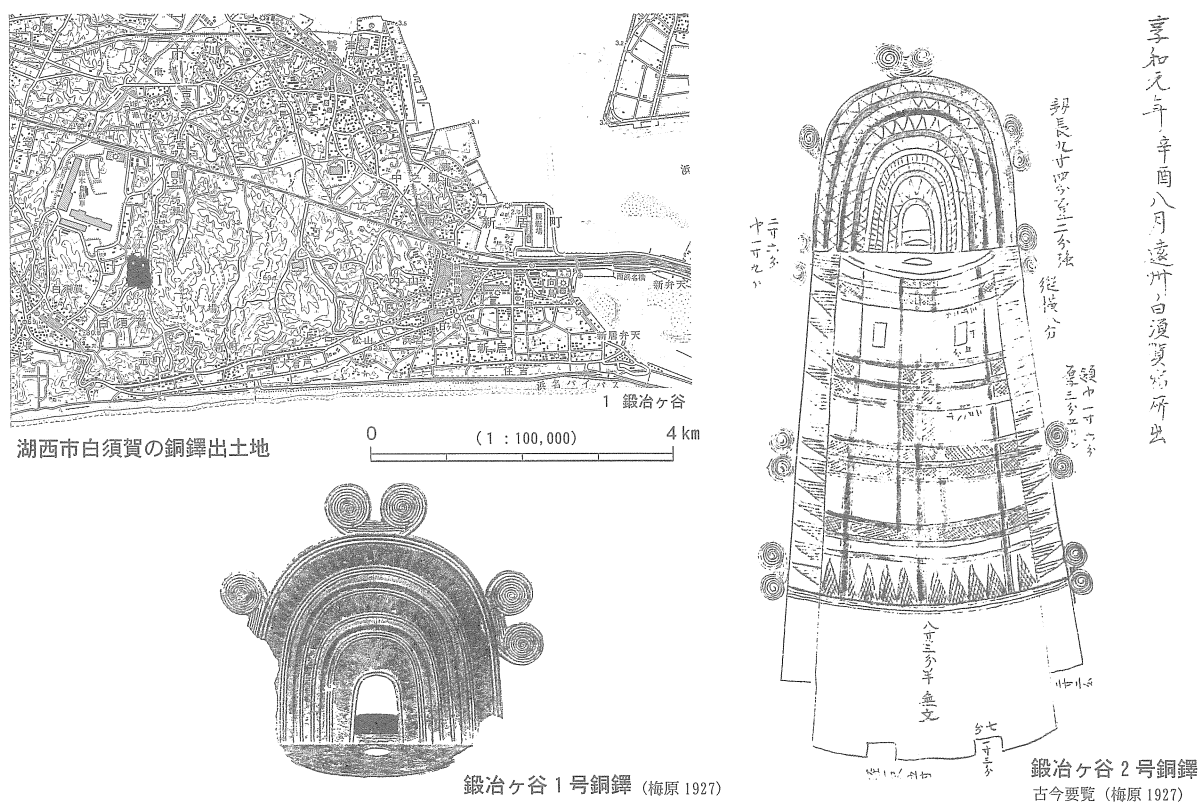
以下、遠江の埋納されたとされる銅鐸(以下、埋納銅鐸)の出土事例を紹介する。

### (1) 湖西市白須賀

浜名湖の南西岸に面した平野の背後に広がる丘陵地帯、その中で南へと長い奥行きを持つ谷において銅鐸2個(鍛冶ヶ谷1号銅鐸・鍛冶ヶ谷2号銅鐸)が出土したとされている(梅原1927、第44図)。この谷は、浜名湖南西側の平野から南にのびる谷であり、平野・浜名湖に通じる坊瀬川が流れる。奥寄りで二又に別れる手前、その西側丘陵急斜面に出土地点があるとされている。なお、他の弥生時代遺跡については、谷の入口付近の五反田遺跡において弥生土器が採取されている程度である。

しかし、この銅鐸出土は1801年(享和元年)であり、現存するのは豊橋市東観音寺にある鈕部分1個だけである。発見の記録が『掛川誌稿』にあり、『銅鐸図記』や『古今要覧稿』には出土銅鐸の絵図が記されている。また、東観音寺の由来書も知られている。梅原末治氏は、これらの記録と地元住民の協力によって、出土数や出土地点に若干の疑問があるとしつつ、銅鐸2個が湖西市白須賀のこの地点から出土したとすることが合理的と判断している(梅原1927)。出土状態などの詳細は不明である。

出土銅鐸は、1個の鈕部分(残存高約34.2cm)だけの現存であるが、絵図によれば2つとも突線鈕5式の近畿式銅鐸であったことがわかる(第44図)。



第44図 遠江の埋納銅鐸①

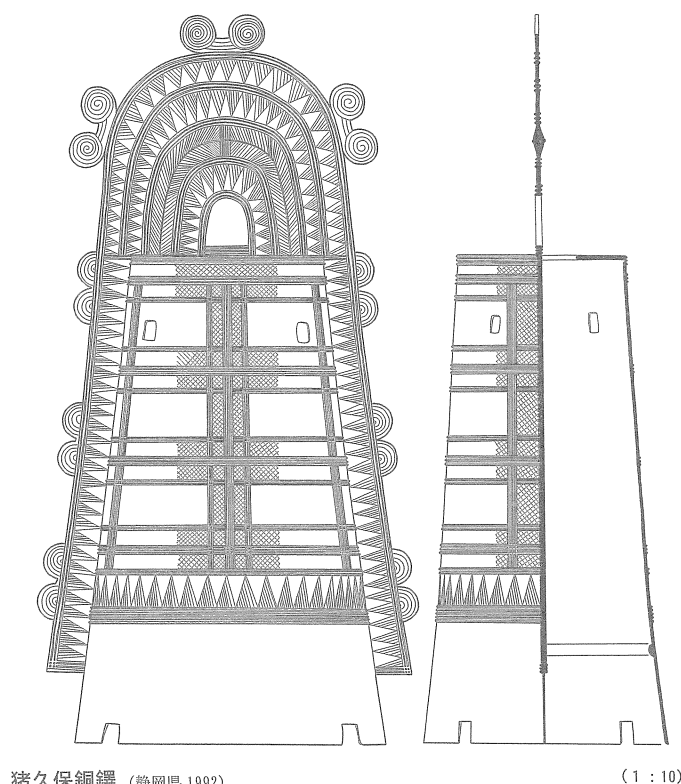
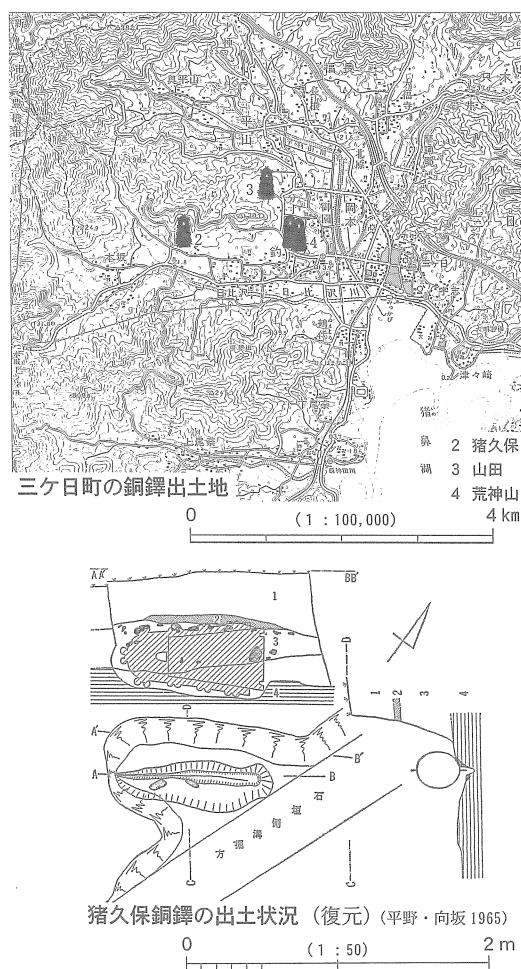
## (2) 浜松市北区三ケ日町

浜名湖の北西岸に面した平野の西側丘陵において、3箇所から計4個の銅鐸（猪久保銅鐸、山田銅鐸、荒神山1号銅鐸・荒神山2号銅鐸）が出土している（第45図）。

猪久保銅鐸は、1965年にみかん園の工事によって出土したものであるが、出土直後の調査によって出土状況などが把握されている（平野・向坂1965）。丘陵の南側に形成された谷の奥寄り、その斜面の中腹から出土している。この谷自体は深くないが、南には日比沢川が流れる細長い谷平野を望む。出土状況については、銅鐸の主軸を等高線に平行にし、鰭を上下にして横倒しで埋納されていた状況が把握されている（第45図）。銅鐸は突線鈕4式の近畿式銅鐸である（第45図）。

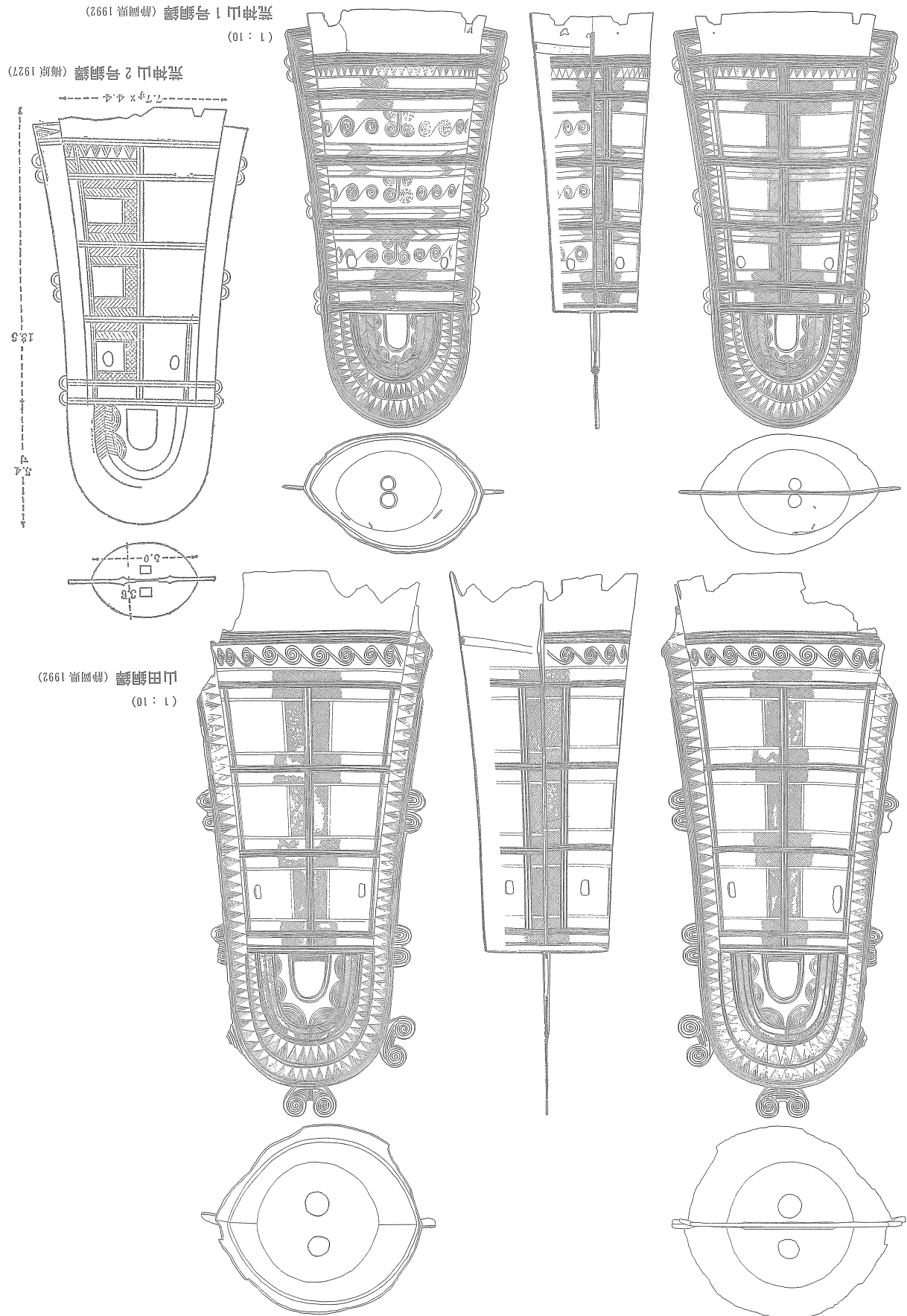
山田銅鐸は、1950年に開墾により発見されたものであるが、埋納状態の調査が行われている（三木1955）。丘陵の東側に形成された比較的広く深い谷において、東向きの斜面中腹で出土している。出土状況については、銅鐸の主軸を等高線に平行にし、鰭を上下にして横倒しで埋納された状況が把握されている。銅鐸は突線鈕4式の近畿式銅鐸である（第46図）。

荒神山1・2号銅鐸は、1838年に丘陵の東側で出土したとされるもので、梅原末治氏による聞き取り調査がなされている（梅原1927）。出土地点は、南東方向を向く丘陵斜面とされている。出土地点の北側に深い谷が入り込んでおり、その入口付近の南側丘陵に位置するともいえる。崖となっていた部分で露出していたものが発見され、後に掘り出されたなどとされているが、出土経緯・出土状態などの詳細は不明である（梅原1927）。銅鐸は2つとも現存しており、突線鈕3式の三遠式銅鐸である（第46図）。



第45図 遠江の埋納銅鐸②

第46図 遠江の埴納銅鐸③





### (3) 浜松市北区都田川流域

**滝峯の谷** 浜松市北区細江町の滝峯の谷では、各所で計6個もの銅鐸(才四郎谷銅鐸、不動平銅鐸、七曲り1・2号銅鐸、悪ヶ谷銅鐸、穴ノ谷銅鐸)が発見されており、銅鐸の谷とも言われている(第47図)。都田川流域に開口する、周辺の中でも比較的深い谷であり、丘陵斜面でも低い位置の見晴らしの悪い場所に埋納された銅鐸が多い。また、この谷の中に当時の居住域や墓域をみることはできない。すなわち、閉塞感のある比較的深い谷の奥まった場所であり、集落域や墓域としての機能が与えられなかった場所であるといえる。なお、谷の開口部や都田川流域には弥生集落の存在がわかっている。

才四郎谷銅鐸は、金属探知機によって発見され、1990年に発掘調査が実施されている(細江町教育委員会1991)。したがって、出土状況・埋納方法の詳細について把握できる(第47図)。出土地点は、滝峯の谷の奥寄り、その南側丘陵に位置する。北に下る斜面に立地し、その傾斜は約12度を測る。銅鐸は約30cmと浅い深さで出土している。出土状況については、銅鐸の主軸を等高線に平行にし、鰭を上下にして横倒しで埋納されていた状況が把握されている。埋納坑およびテラス状遺構が検出されている。銅鐸は、突線鈕3式の近畿式銅鐸である(第47図)。

不動平銅鐸は、1967年に畑の造成時に発見されたもので、出土状況は聞き取りによって把握されている(向坂1968、静岡県教育委員会1969)。出土地点は、滝峯の谷の中央付近で、南東に派生する支谷の奥寄り、その北東丘陵に位置する。丘陵の西に下る急斜面から出土している。出土経緯から、浅いところにあったものと推測され、聞き取り調査や出土銅鐸の観察によって、横倒しの状態で主軸を等高線に直交させ、鈕を高い方に向け、鰭を上下にしていたと復元されている(向坂1968)。銅鐸は突線鈕3式の近畿式銅鐸である(第47図)。

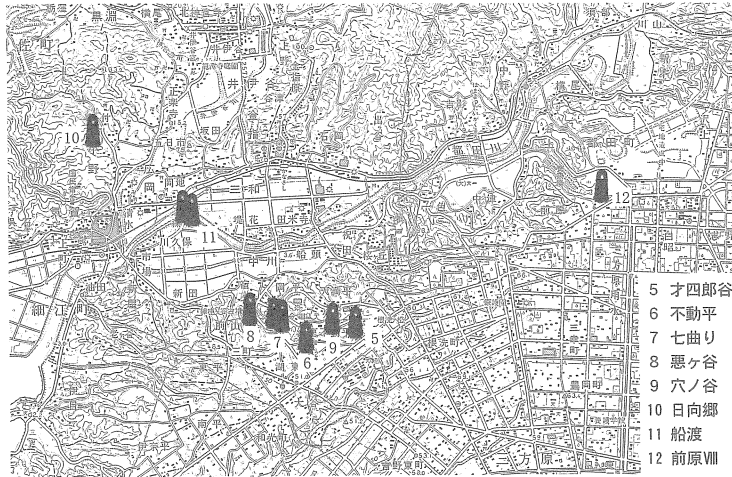
七曲り1号銅鐸は、1966年に畑の造成によって発見されたもので、出土状況は聞き取りによって把握されている(静岡県教育委員会1969)。出土地点は、滝峯の谷の西寄り、その南側丘陵の北東に下る急斜面に立地する。出土経緯から、浅いところにあったものと推測される。聞き取りによれば、横倒しの状態で鰭を水平にし、南東に鈕を向けていたという(静岡県教育委員会1969)。銅鐸は突線鈕3式の近畿式銅鐸である(第48図)。

七曲り2号銅鐸は、1967年に1号銅鐸出土地点の約30m北西で発見されたもので、造成で破壊された多くの破片が採取されている。出土地点の地形的特徴は七曲り1号銅鐸出土地点と同様である。銅鐸発見後の調査によって埋納坑と推定される土坑が確認されている。その写真をみると、銅鐸は横倒しの状態であったと推測できる。しかし、それ以上の詳細は復元し難い。銅鐸は突線鈕3式の三遠式銅鐸である(芝田1982、第48図)。

悪ヶ谷銅鐸は、1912年に親子で発見・採掘されたもので、出土状況は聞き取りによって把握されている(大野1912、梅原1927)。出土地点は、滝峯の谷の東寄りで南に派生する支谷、その東側丘陵に位置する。西に下る斜面に立地し、急斜面であったようである。発見の経緯から浅いところにあったことがわかり、聞き取りによれば、銅鐸は横倒しの状態で鰭を水平にし、北北西に鈕を向けていたという。銅鐸は突線鈕3式の三遠式銅鐸であり、「トリ」などの絵を伴う(第48図)。

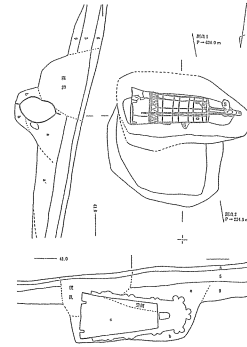
穴ノ谷銅鐸は、1987年に造成工事のために抜根した根に抱えられるようにして出土している。その後、銅鐸の痕跡調査などが実施された(栗原1988)。出土地点は、滝峯の谷の奥寄り、その北側丘陵の約30度の斜面にある。出土の経緯から浅いところにあったことがわかり、出土後の調査によれば、銅鐸は横倒しの状態で主軸は等高線に平行、鰭は斜面に平行する方向で斜めになっていたと判断されている。銅鐸は突線鈕3式の近畿式銅鐸である(第47図)。

**その他** 都田川流域では、滝峯の谷のほかに3箇所で4個の銅鐸出土(細江町岡地の船渡1・2号銅鐸、細江町小野の日向郷銅鐸、都田町前原Ⅷ遺跡の前原銅鐸)が知られている(第47図)。



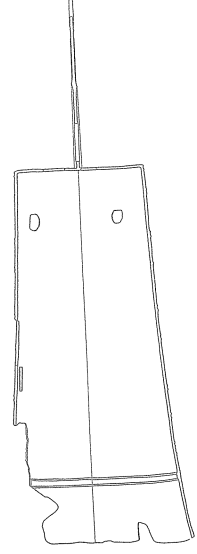
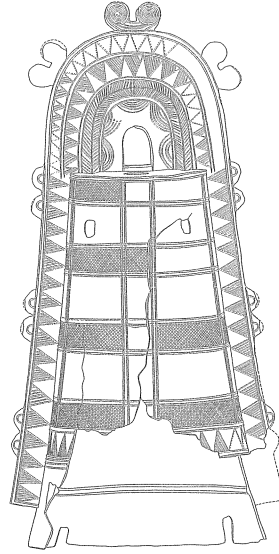
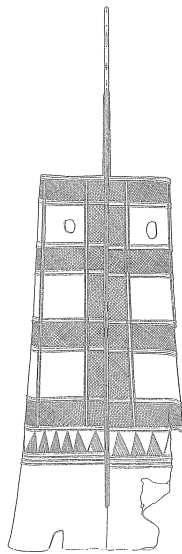
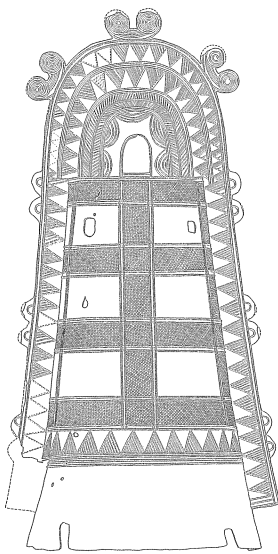
都田川流域の銅鐸出土地

0 (1 : 100,000) 4 km



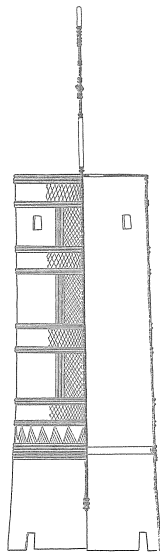
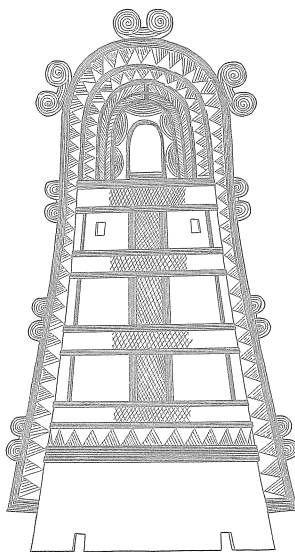
才四郎谷銅鐸の出土状況  
(細江町教育委員会 1991)

0 (1 : 50) 2 m



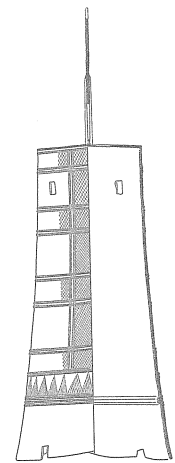
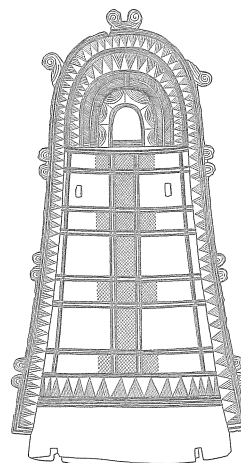
才四郎谷銅鐸 (細江町教育委員会 1991)

(1 : 10)



不動平銅鐸 (静岡県 1992)

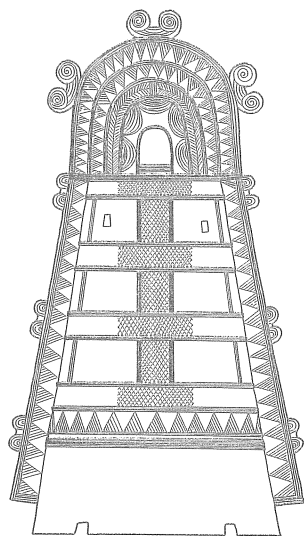
(1 : 10)



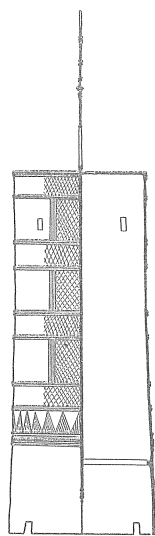
穴ノ谷銅鐸 (静岡県 1992)

(1 : 10)

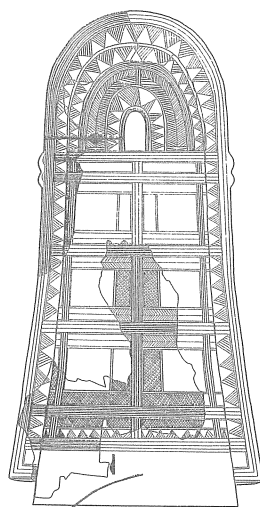
第47図 遠江の埋納銅鐸④



七曲り 1号銅鐸 (静岡県 1992)

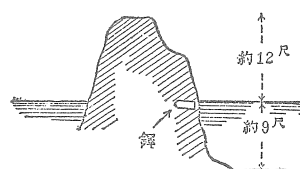
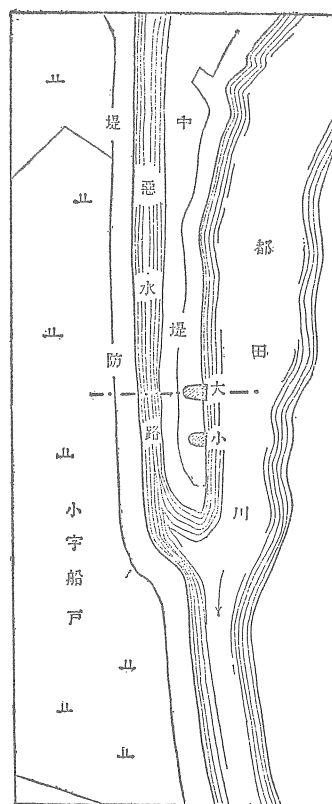
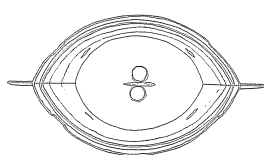
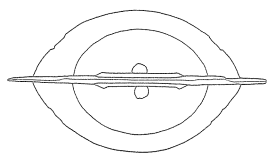


(1 : 10)

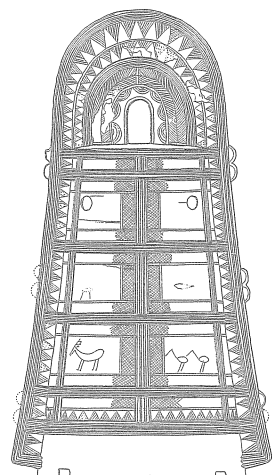


(1 : 10)

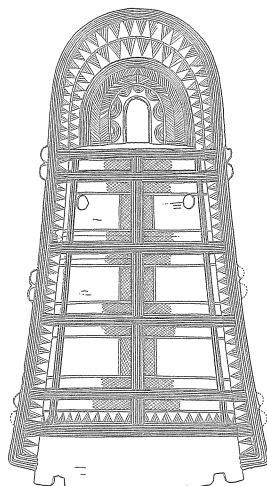
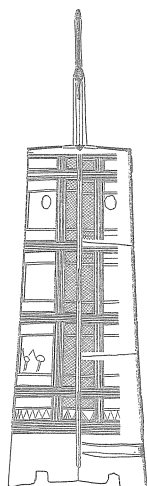
七曲り 2号銅鐸 (静岡県 1992)



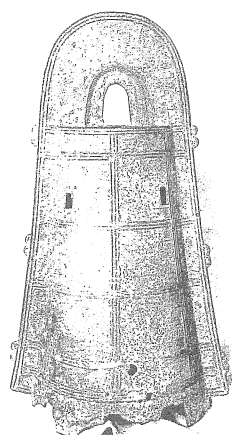
船渡 1・2号銅鐸の出土状況 (梅原 1927)



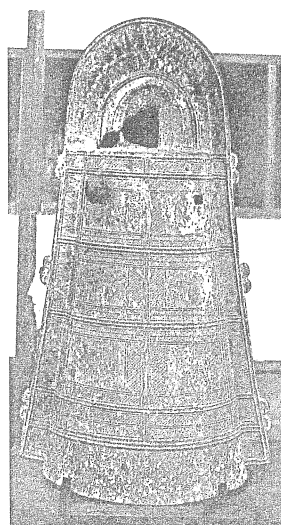
悪ヶ谷銅鐸 (静岡県 1992)



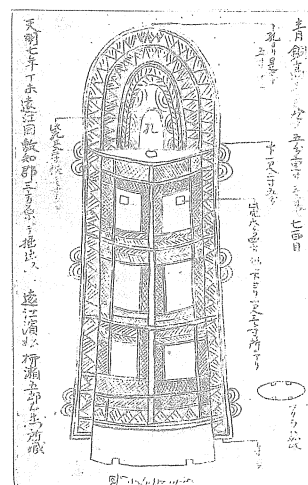
(1 : 10)



船渡 1号銅鐸 (梅原 1927)



船渡 2号銅鐸  
(梅原 1927)



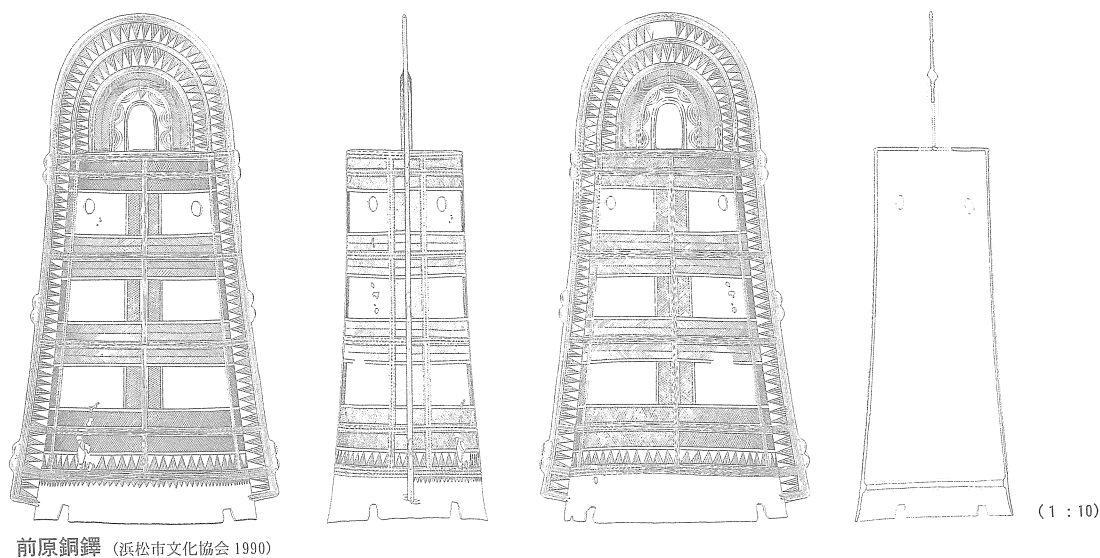
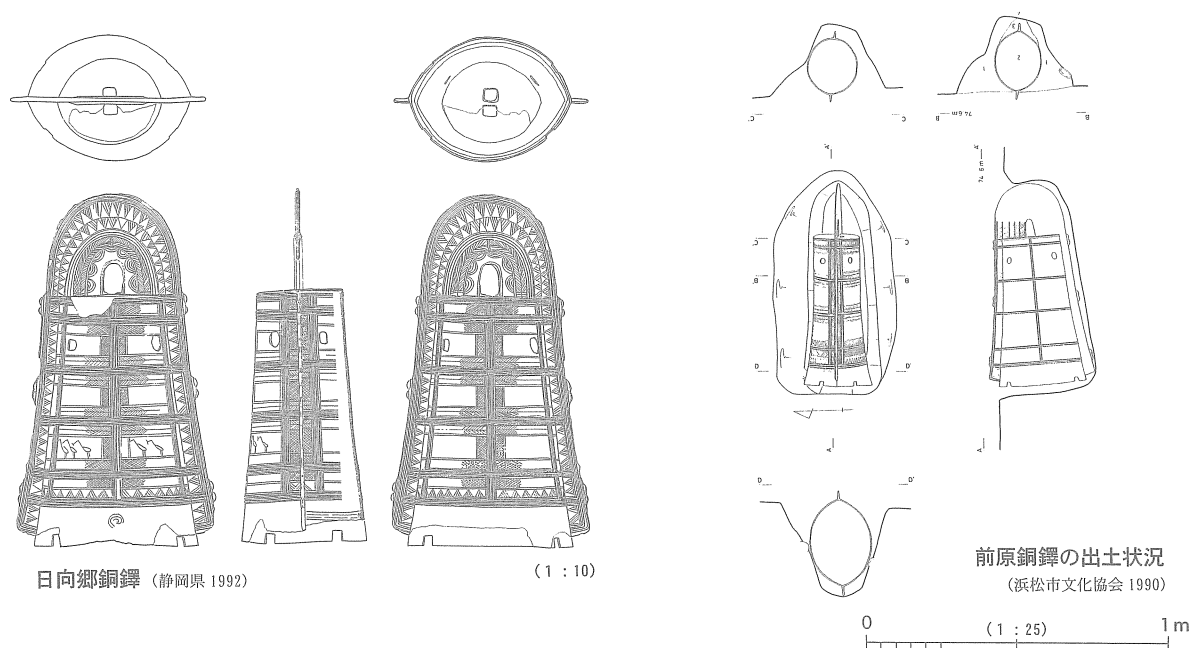
三方原発見の銅鐸  
(梅原 1927)

銅鐸図記

第48図 遠江の埋納銅鐸⑤

船渡1・2号銅鐸は、都田川流域の沖積平野から出土している。出土地点は、都田川と支流が合流する付近の岸にあり、滝峯の谷の入口を望むことができる位置にある。1880年、都田川北岸の堤防に露出している銅鐸1個が水泳中に発見され、さらに、数日後に付近でもう1個が発見された。出土状況などについて、梅原末治氏が関連記事と実地（聞き取り）の調査を行っている（梅原1927、第48図）。それによれば、2つの出土地点は若干の隔たりを伴い、両銅鐸は裾を南の川側に向け、鰭を水平に横倒しの状態であったとされる。両銅鐸はともに突線鈕3式の三遠式銅鐸である（第48図）。

日向郷銅鐸は、浜名湖の北東、浜松市北区細江町小野の丘陵地において出土している。ここでは日向郷銅鐸と称すが、小野銅鐸・堂道銅鐸などとも言われている。1933年に畑造成のための土取作業中に発見されたが、出土状況などについて聞き取りがなされている。出土地点は、井伊谷川が流れる平野から北西にのびる谷、その谷から南西に分岐する支谷の北側丘陵斜面に立地する。出土状態については、鈕を西に向け鰭を平らにして置かれていたとされている（船越・山崎1933）。銅鐸は突線鈕3式の三遠式銅鐸である（第49図）。



第49図 遠江の埋納銅鐸⑥

前原銅鐸は、船渡から5kmほど都田川を上った付近の南側丘陵地で出土している。1987年、土地区画整理事業に伴う発掘調査によって発見され、埋納遺構および埋納状態の調査が行われた（浜松市文化協会1990、第49図）。出土地点は、滝峯の谷と似た谷の最奥部、その丘陵上縁辺（三方原台地の縁辺）に位置する。滝峯の谷の銅鐸出土地点とは異なり、高所の見晴らしの比較的良好な場所にある。銅鐸は、主軸を等高線に平行にし、裾を西、鱗を上下にして横倒しの状態で土坑（埋納坑）の中に埋納されていた。周辺から関連する遺構・遺物の発見はなかった。銅鐸は、突線鈕2式の三遠式銅鐸である（第49図）。

なお、これらの他に浜松市三方原で出土したとされる三方原銅鐸をあげる。『銅鐸の研究』（梅原1927）によれば『日本諸手船』や『銅鐸図記』に記録があり、1787年に三方原で発見、出土銅鐸の絵図から三遠式銅鐸であることがわかる（第48図）。それ以上の詳細は不明であり、銅鐸の行方も不明である。

#### （4）浜松市南東部

浜松市南東部の天竜川平野には、山の神遺跡をはじめとする弥生時代の盛んな集落形成が把握されている。そうした地域の中で、2箇所において埋納されていたと思われる銅鐸が計4個出土している（浜松市東区和田町の木船1・2号銅鐸、浜松市南区芳川町のツツミドリ1・2号銅鐸）（第50図）。

木船1・2号銅鐸は、東海道線天竜川駅の西数百mの地点で出土している。天竜川の沖積平野の中にあるが、1908年に周囲より高い場所を切り崩している時に出土したということから、自然堤防上にあつたものと把握することができる。梅原末治氏の聞き取り調査では、地表から2m強の深さにおいて2個の銅鐸が南北に並ぶ位置にあり、ともに鈕を北、鱗を水平にして横倒しの状態にあつたという。ただし、他の情報もあることから絶対のものとは評価できないとしている（梅原1927、第50図）。銅鐸はともに突線鈕3式の三遠式銅鐸であり、1号銅鐸には「トリ」の絵を伴う（第50・51図）。

ツツミドリ1・2号銅鐸は、木船の南約3kmの地点で出土している。出土地点は、天竜川の西を流れる芳川の西岸にある。1868年の大雨の際に、川岸が削られて銅鐸2個が発見されている。聞き取り調査によって、入れ子になった2個の銅鐸が裾を川側（東）に向けて横倒しの状態にあつたことが把握されている（第50図）。入れ子の内側にあつたとされる1号銅鐸は、突線鈕3式の三遠式銅鐸である（第51図）。外側の2号銅鐸は行方がわからず、形態等についても不明である。

#### （5）天竜川以東

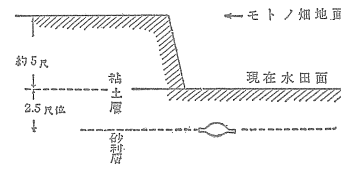
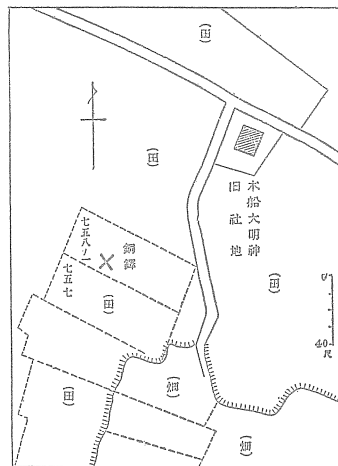
天竜川以東では、本書で報告している磐田市西の谷遺跡（第51図）の敷地1～3号銅鐸のほか、掛川市長谷において埋納されていた可能性が指摘できる銅鐸の発見が知られている（第43図）。

敷地1～3号銅鐸は、遠州灘へと流れる太田川の支流、敷地川の西側丘陵の谷奥で出土している。敷地1・2号銅鐸出土伝承地点と敷地3号銅鐸出土地点の2地点があるが、ともに同じ谷の南側斜面にある。見晴らしは悪い。敷地1・2号銅鐸は1890年に山芋掘りの際に発見、その後の聞き取り調査によって、2個の銅鐸は主軸を等高線に平行にして、鱗を水平に横倒しの状態にあつたとされ、さらに、1号銅鐸が2号銅鐸のすぐ下にあつたことが把握されている（梅原1927、第51図）。敷地3号銅鐸については本書で報告しているように、2000年の第二東名建設に伴う発掘調査によって、銅鐸は主軸を等高線に平行にして、裾を西に向け、鱗を上下にして横倒しの状態で土坑（埋納坑）に埋納されていたことが判明している（第51図）。3個の銅鐸はいずれも突線鈕3式の三遠式銅鐸である（第52・53図）。

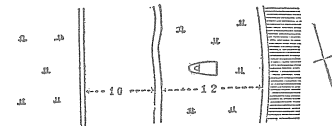
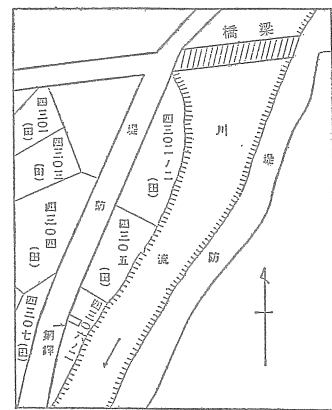
長谷銅鐸は、1772年に逆川流域の南側丘陵（小笠山丘陵）から出土したとされるものである。しかし、いくつかの記録や絵図が残されているだけで、出土状況の詳細や銅鐸の行方は不明である（梅原1927）。絵図によれば、銅鐸は三遠式銅鐸である（第53図）。



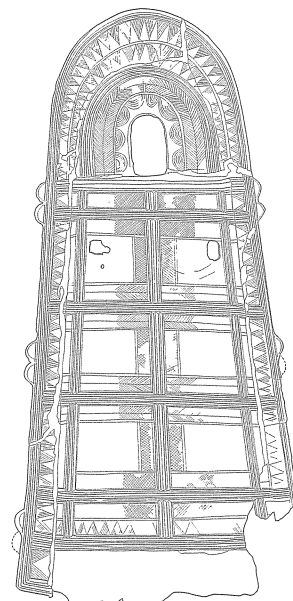
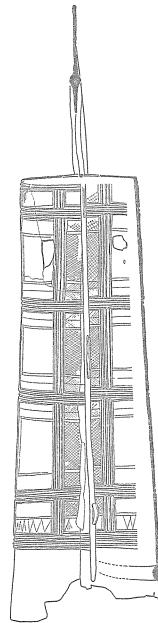
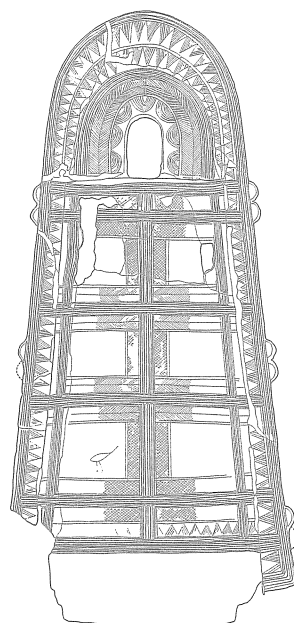
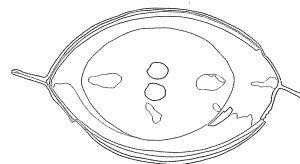
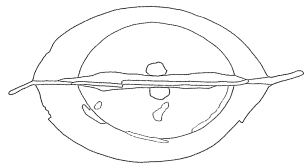
浜松市南東部の銅鐸出土地



木船銅鐸の出土状況 (梅原 1927)



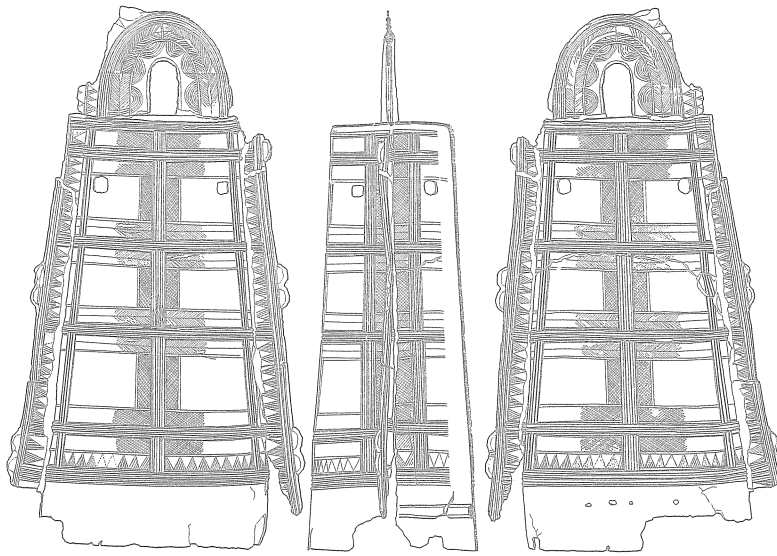
ツツミドリ銅鐸の出土状況 (梅原 1927)



木船 1 号銅鐸 (静岡県 1992)

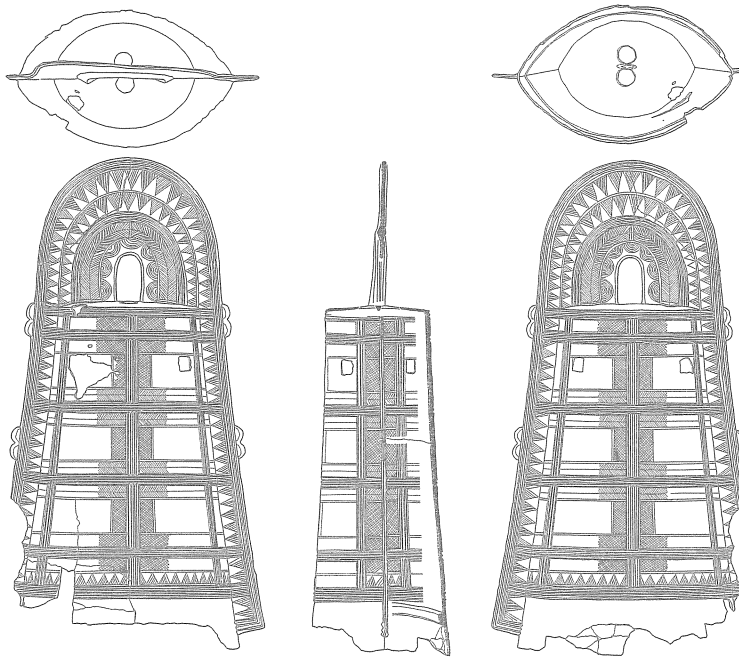
(1 : 10)





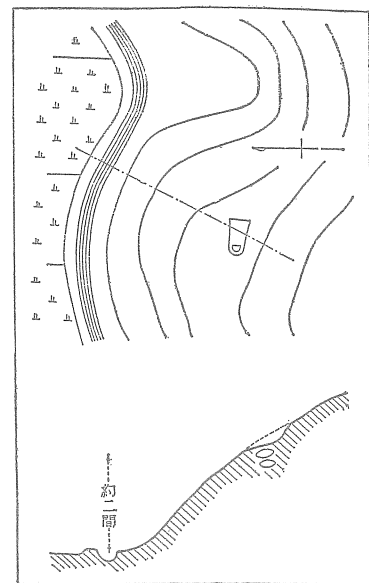
木船 2号銅鐸 (静岡県 1992)

(1 : 10)

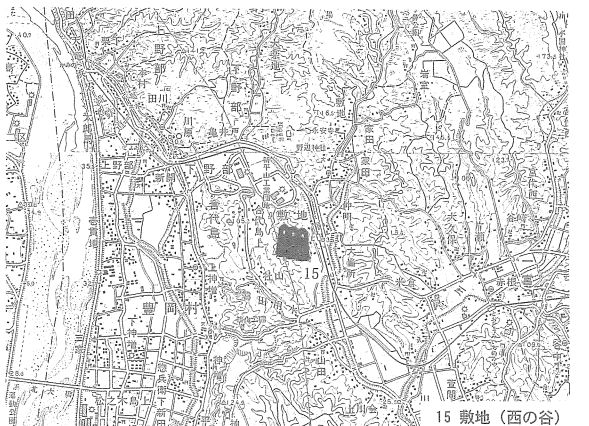


ツツミドリ 1号銅鐸 (静岡県 1992)

(1 : 10)



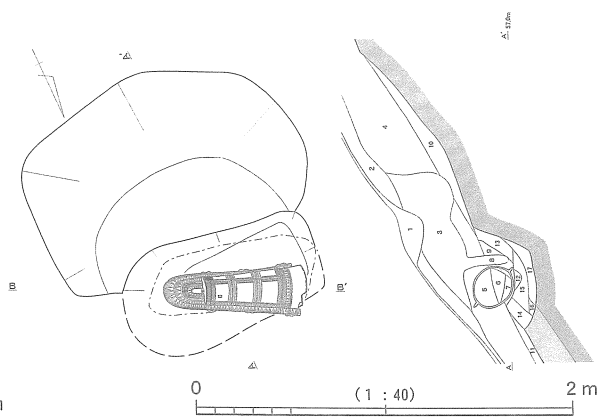
敷地 1・2号銅鐸の出土状況 (梅原 1927)



磐田市敷地の銅鐸出土地

(1 : 100,000)

4 km



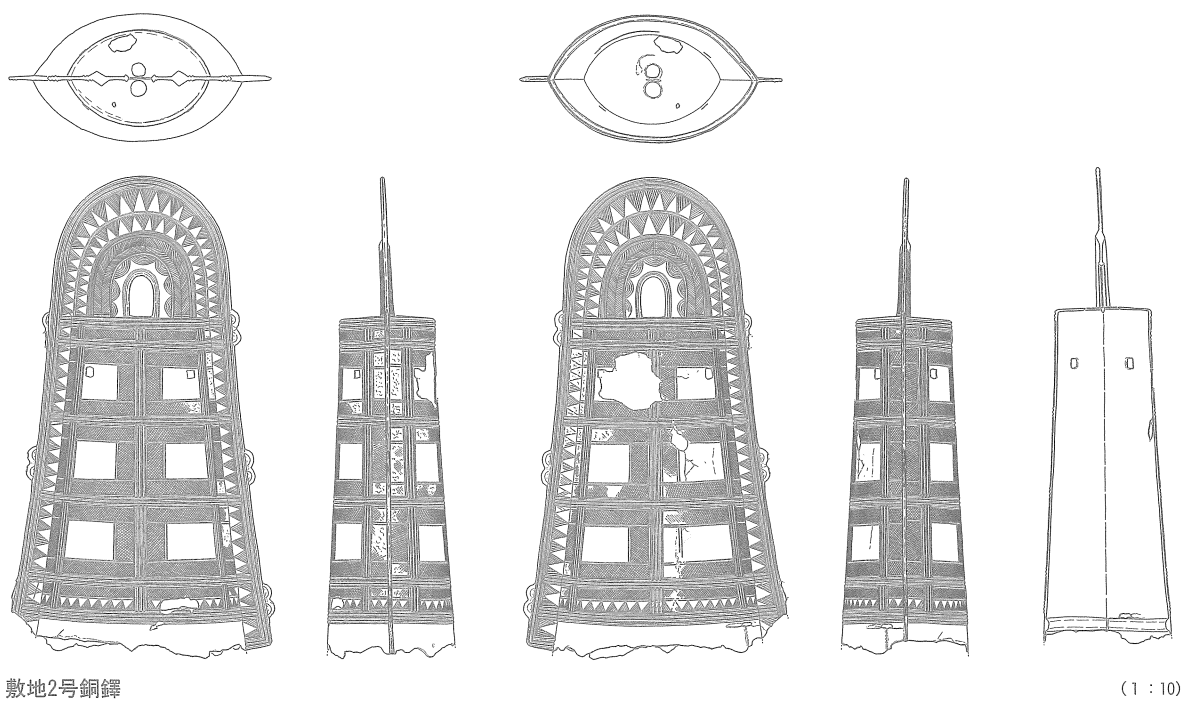
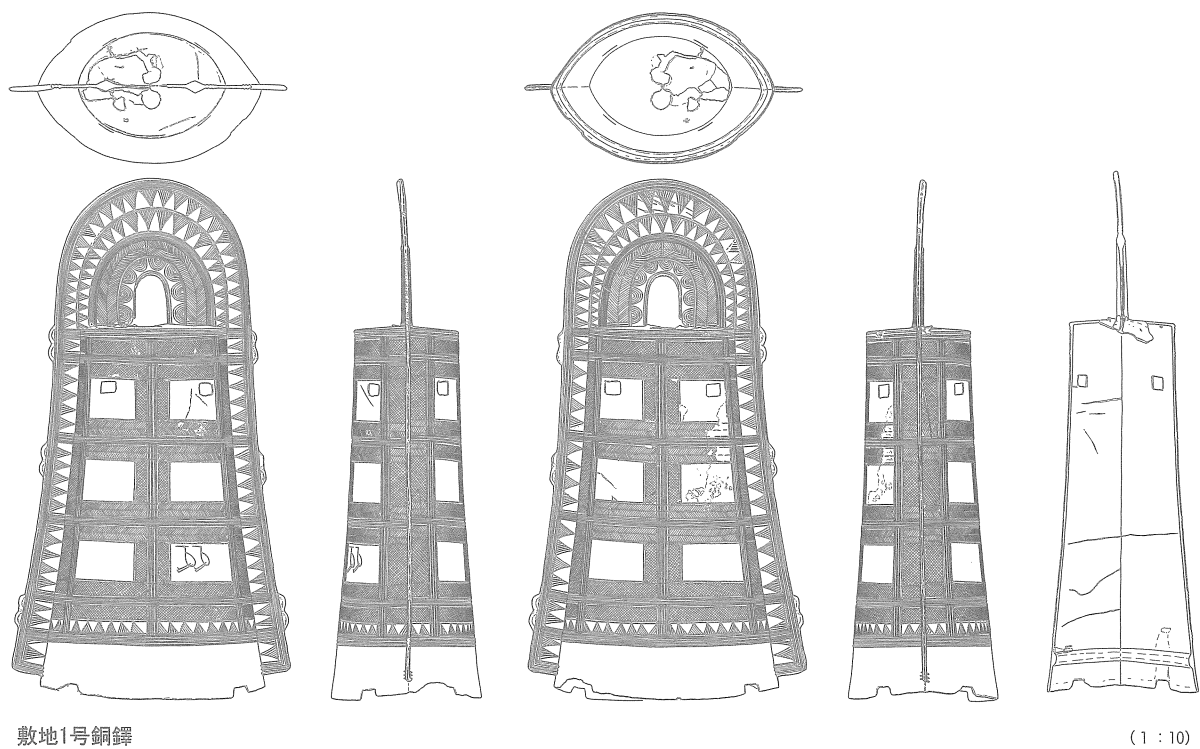
敷地 3号銅鐸の出土状況

(1 : 40)

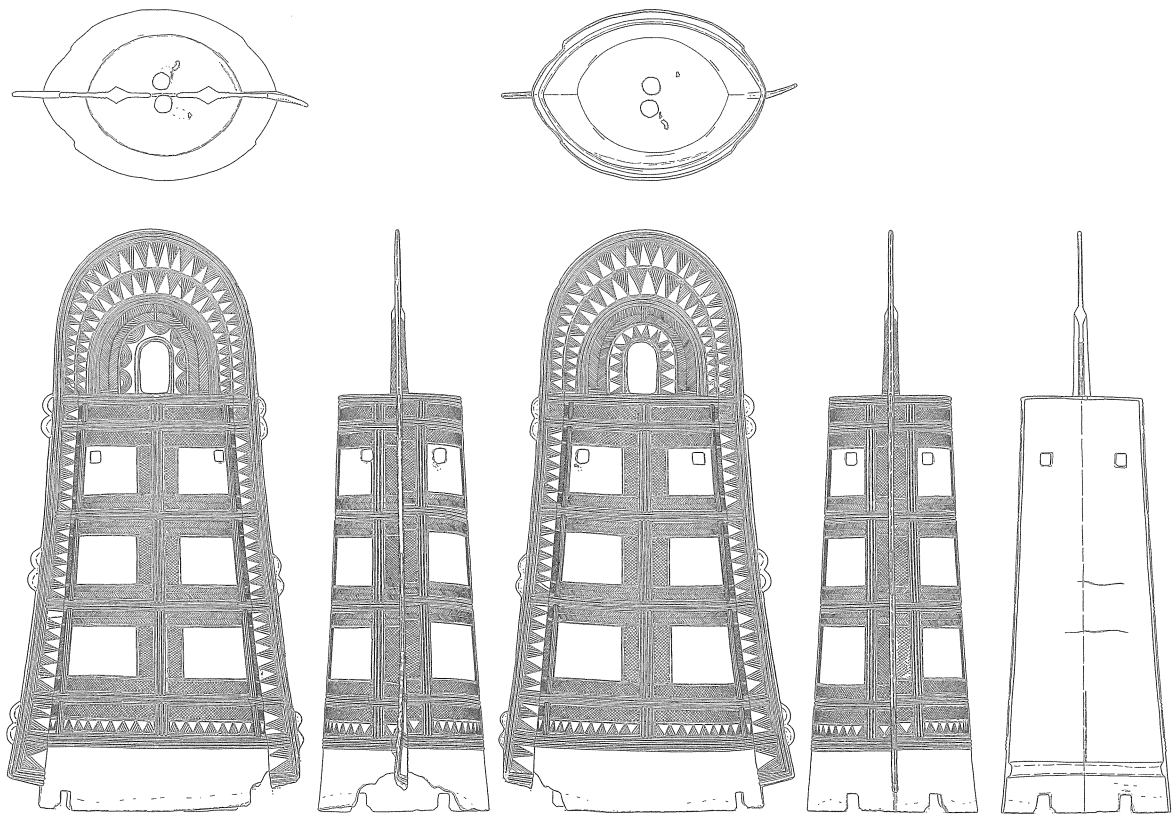
2 m

第51図 遠江の埋納銅鐸⑧



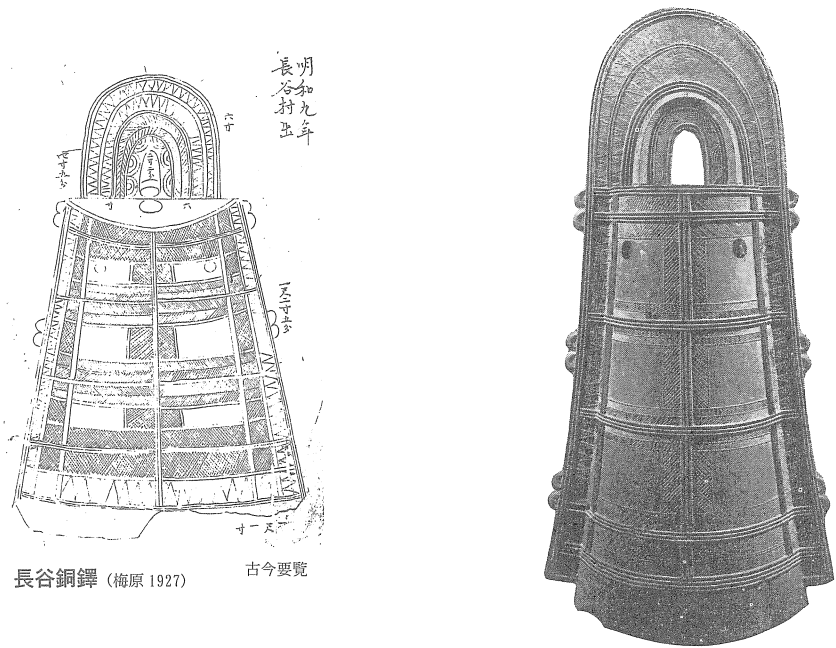


第52図 遠江の埋納銅鐸⑨



敷地 3 号銅鐸

(1 : 10)



長谷銅鐸 (梅原 1927)

古今要覧

ギメー博物館所蔵の伝遠江出土銅鐸 (静岡県 1992)

第53図 遠江の埋納銅鐸⑩

### 3. 銅鐸埋納の方法について

#### (1) 銅鐸埋納の特徴

銅鐸が埋納される場所（銅鐸埋納地の立地）については、既に多くの研究がなされており、丘陵地が多いほか、集落周辺を埋納地とした事例も確認されている（寺澤1992、野洲町立歴史民俗博物館1996、島根県教育委員会ほか2002）。さらに、丘陵地でも頂上に近いか裾に近いのか、どの向きの斜面であるかなどについて様々な例があることもわかっている。しかし、基本的には丘陵斜面地の場合が圧倒的に多く、集落や墓域の立地とは異なる傾向にあることは明らかである。また、集落においても周縁に位置する例が目立つ。以上から、集落から離れた地域の境界域、集落の外縁などに銅鐸を埋納した傾向を見出すことができ、こうした特徴は先にあげた遠江の諸事例においても当てはめることができる。

銅鐸埋納の方法についても、諸研究によって鰭を上下にして横倒しの状態で埋納する方法が多く採られていることがわかっている（寺澤1992、桑原1995、野洲町立歴史民俗博物館1996、井上2001など）。鰭を水平にしている場合や突線鈕1式以前では正位や倒立状態で埋納された事例も知られているが、鰭を上下にして横倒しの状態で埋納された事例が圧倒的に多い（島根県教育委員会ほか2002など）。そして、遠江の発掘調査事例においても、その全てが鰭を上下にして横倒しの状態に埋納されたことがわかっている（第45・47・49・51図）。

しかし、先にあげた遠江の諸事例をみていくと、聞き取り情報によるものの中に鰭を水平にして出土したとされる場合が少なからずあり、敷地1・2号銅鐸についても鰭を水平にしていたという聞き取り情報が得られている（第48・50・51図）。

そこで、今回の敷地3号銅鐸の調査成果を取り上げたい。この調査では、鰭を水平に近い状態にして銅鐸が出土したが、綿密な遺構調査を経ることによって、鰭を上下にして埋納されたことが判明した（第51図）。すなわち、地表面下の浅い位置で出土する場合、出土状況において鰭が水平の位置にあっても、埋納した時には鰭を上下の位置にしていた可能性が考慮されるのである。

こうした点から、筆者は敷地1・2号銅鐸について埋納方法の復元を試みた（田村2002）。以下、その内容を抜粋して再録する。

#### (2) 敷地1・2号銅鐸埋納方法の復元

**出土状況の記録** 敷地1・2号銅鐸の発見は1890（明治23）年のことであり、豊岡村に住む松野彦太郎、西田七財茂両氏が山芋掘りに出掛けた際に偶然発見したものである。その後、発見から数十年を経た後に梅原末治氏が聞き取り調査をしている。『銅鐸の研究』（梅原1927）では、敷地1・2号銅鐸の所蔵・寸法・紋様・発見の経緯などについて記述した後、聞き取り調査した発見状況（出土状態）についても著している（第2章第3節、第51図）。ここでは、聞き取った敷地1・2号銅鐸の出土状態の内容について、次のように整理する。

- A 傾斜地の地表下約1尺（30cm）の深さにあった。
- B 鰭を左右に水平にして横たわっていた。
- C 2個の銅鐸ともに主軸が東西方向を示していた。
- D ただ、鈕が東西どちらの方向を向いていたかはわからない。
- E 2個の銅鐸が上下に重なっており、2号銅鐸が上になっていた。

発見時から聞き取りを行うまで数十年が経っており、これら内容の全てを盲目的に信じることはできない。しかし、聞き取った内容は比較的詳細なものであり矛盾もないことから、比較的信用できるものと考えられる（梅原1927）。

一方、このA～Eに合わせて敷地3号銅鐸の出土状態（第51図）を整理すると、次のとおりである。

- a 傾斜地の地表下約15cmにあった。
- b 左右の鰭を斜めに傾かせて横たわっていた。
- c 主軸が東西方向を示していた。
- d 鈕は東方向を向いていた。
- e 単独の埋納であった。

a・cについては、敷地1・2号銅鐸の出土状態（A・C）と共通している。このことは、敷地1・2号銅鐸出土状態に関わる情報の信憑性を裏付けると考えることもできる。

Bとbについては、両鰭が横に水平か斜めかの違いがあるものの、一般的に多いと言われる上下の状態ではないという点で共通している。敷地3号銅鐸の発掘調査では、鰭を斜めに傾かせた出土状態は、鰭を上下に埋納していたものが崩落・流土によって上の鰭が斜面下方（北）に押され、傾いた結果であることが把握できている。敷地1・2号銅鐸の出土状態についても、梅原氏が「今割合に急傾斜を示している間に若干の凹みを存してなお採掘した名残をとどめている。」と記したように、出土（伝承）地点が急傾斜である点、また地表面下約30cmという浅い深さで発見している点を考慮すれば、崩落・流土の影響を受けた結果の出土状態である可能性が十分に考えられる。とすれば、敷地1・2号銅鐸の埋納状態は、銅鐸埋納状態が把握できている事例の多く、そして敷地3号銅鐸の埋納状態と共通し、左右両側の鰭を上下にしていたとするのが妥当と考える。また現存の敷地1・2号銅鐸では、共に左右で錆等の状況が異なっている。古くから銅鐸の左右で土層等における周囲の環境の違いがあったと考えることができ、この根拠の一つともなり得る。

Dとdについては、鈕を異なる方向に向けて埋納した近接・複数埋納事例もあり、敷地3号銅鐸埋納状態から敷地1・2号銅鐸埋納状態における鈕の方向を安易に決めることはできない。また、Eとeについては、敷地1・2号銅鐸の複数埋納と敷地3号銅鐸の単独埋納という違いを示す。

**銅鐸に残された発見時の痕跡** 敷地3号銅鐸の調査を契機に、敷地1号銅鐸・敷地2号銅鐸についても実見する機会を与えていただいた。ここでは、公開資料（静岡県1992）や実見にて確認できる発見時の痕跡についてあげ、さらなる検討を加えたい（第54図）。

敷地1号銅鐸については、次のような埋納後に受けたと考えられる欠損・傷・変形が認められる。

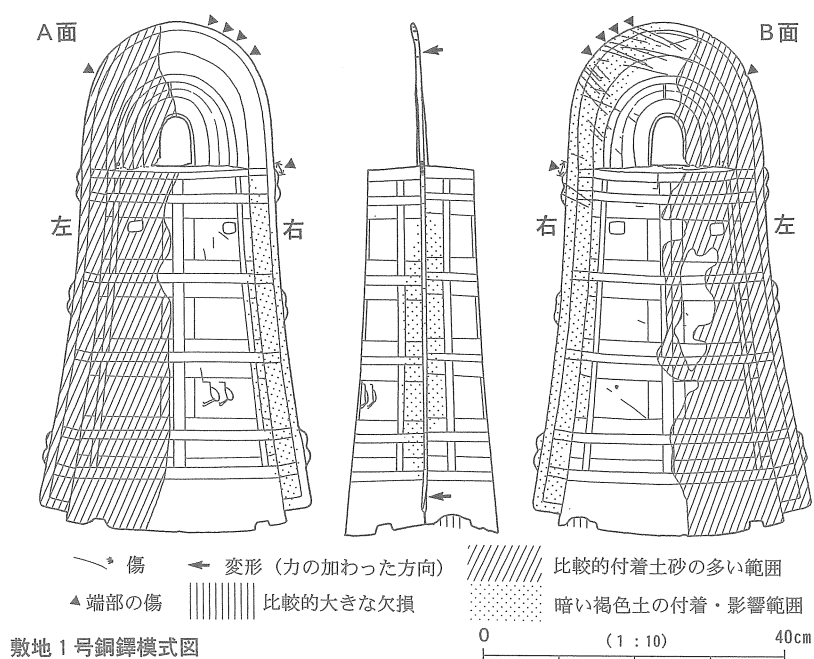
- ① 舞の左半部がB面側に大きく欠損し、中央が内部へ落ち込んでいる。
- ② B面右下隅の裾下端部が欠損している。
- ③ 傷の多くはB面の鈕の右半部にあり、右上がりの傷である。
- ④ 右鰭上半端部から鈕の右側端部にもいくつかの傷がある。
- ⑤ 鈕がA面側へと曲がっている。
- ⑥ 右鰭下端部がA面側へと曲がっている。

①・③～⑤は発見時に受けたものと考えられ、鈕寄りを中心に打撃を与えていることがわかる。①の打撃方向については、詳細に判断することが難しい。しかし、③～⑤については次のように判断することができる。先の聞き取り調査によれば、「…鰭を左右にして水平の位置に上下二個重なってあったが、傾斜地の為に側面の一部が露われていて注意を惹いたのである。」といった発見状況である。鍬のような山芋掘りの道具で土を掘って銅鐸を発見したことを合わせて考慮すれば、上になった面の斜面下（北）方寄りを中心に打撃を与えた可能性が高い。とするならば、B面を上、右側を斜面下（北）方に向けた出土状態であったと復元することができる。

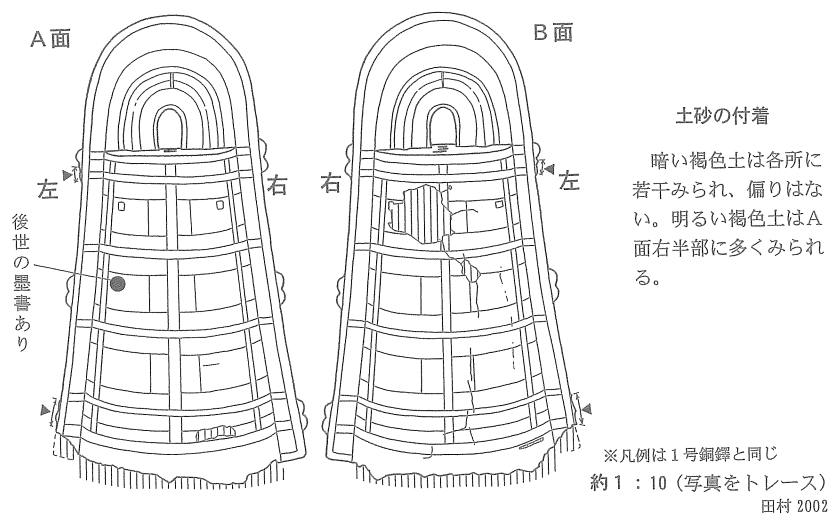
②・⑥については、発見時に大きな損傷を与えていない敷地3号銅鐸にも同様の状況を確認することができ、そこから類推することができる。②については埋納以前からのものである可能性もあるが、

⑥は崩落・流土の影響によるものである可能性が高い。すなわち、上にしていた鱗の下端部が、崩落・流土の影響で斜面下（北）方に曲がったと考えられるのである。この点からも、右鱗が斜面下（北）方にあったという上記同様の出土状態を復元することができるのである。

さらに、本鐸は完全なクリーニングをされていないため、若干の土砂が付着したままになっている。外面については、左側により多くの土砂が付着しており、一方、傷の多い鈕B面右半や身の右側寄りには表土と思われる他より暗い褐色土が付着している。よって上記と同じく、B面が上、右側が斜面下（北）方にあったと復元することができる。なお、内部では右寄りに多くの土砂が残されており、復元した出土状態では不自然にも感じるが、この点については、舞内面のほぼ全面に土砂が付着していること、土砂のない部分では土砂を取り除いた跡がいくつかみられることから、本来は銅鐸内部のほぼ全体に土砂が入っており、いくらかの土砂を取り除いた結果と考えられる。よって、内部の土を積極的な埋納姿勢の根拠とすることは難しいと考えた。



敷地1号銅鐸模式図



敷地2号銅鐸模式図

第54図 敷地1・2号銅鐸の発見時の痕跡

敷地2号銅鐸についても、埋納後に受けたと考えられる欠損・傷・変形を見ることができ、また発見時より完全なクリーニングをされていないため、土砂が若干付着したままになっている。欠損部はB面に多く、さらにB面身の中央外面に数十cmにわたる縦方向の傷を受けている。よって、B面を上にして出土状態を復元することができる。また、B面身中央の傷がやや左に寄っていること、左鰭の下端部と左側最下の飾耳が欠損していること、さらに外面付着土砂の状況から、左側を斜面下（北）方に向けた出土状態であったと復元できる。

裾部は全周が欠損しており、裾部に多くの打撃を与えたと考えられる。また、A面の身の下側右寄りにも欠損部があるが、この欠損部の上端部内面に外面へのわずかなめくれがみられ、内面からの打撃によると判断できる。よって、B面を上にしていたという先の復元と矛盾することはない、裾部に多くの打撃を与える中で、下にあったA面の内面に打撃の一部が達したと想定することができる。

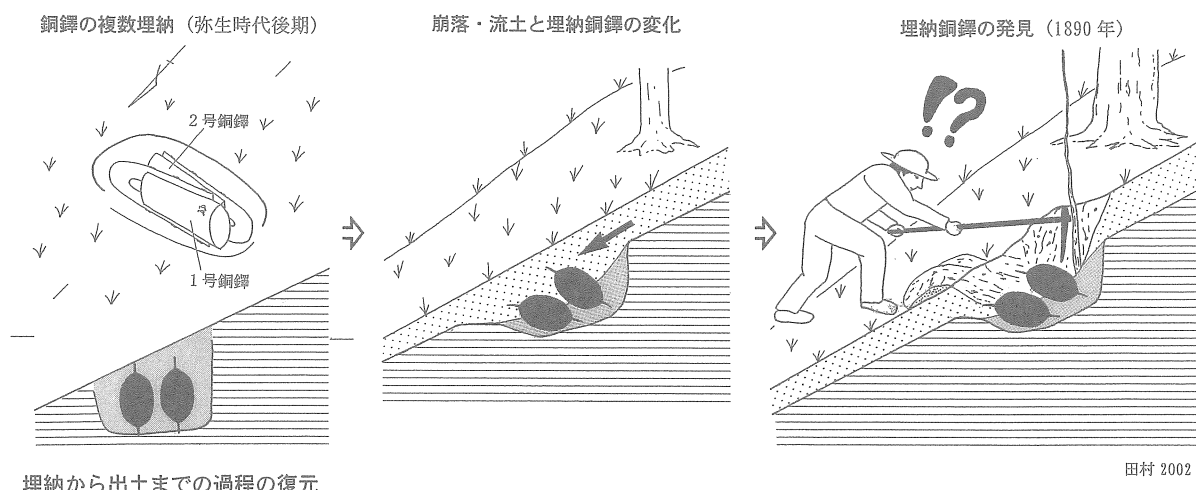
以上から次のような出土状態・埋納状態が復元できる。敷地1号銅鐸はB面を上、右側を斜面下（北）方に向けて出土したと復元でき、よって埋納状態においては、「トリ」の描かれたA面を斜面下（北）方にして右鰭を上を立てていた、すなわち鈕を東に向けていたと復元できる。敷地2号銅鐸はB面を上、左側を斜面下（北）方に向けて出土したと復元でき、よって埋納状態においては、A面を斜面下（北）方にして左鰭を上を立てていた、すなわち鈕を西に向けていたと復元することができる。

**埋納状態の復元** これまでの検討で復元した敷地1・2号銅鐸の埋納状態については、次のとおりである。もちろん事実確認ができない以上、下の復元が絶対であるということとはできない。ただ、これまで述べてきた検討を踏まえたものであるため、高い可能性をもって示すことができたと考えたい。

- A 傾斜地の比較的浅い深さに埋納した。
- B 銅鐸全体を横に倒し、左右の鰭を上下にした状態で埋納した。
- C 2個の銅鐸ともに主軸を東西方向、等高線に沿った方向にして埋納した。1号銅鐸は「トリ」を描いた面（A面）を、2号銅鐸は欠損の少ない面（A面）を斜面下（北）方に向けて埋納した。
- D 1号銅鐸の鈕は東、2号銅鐸の鈕は西へと互いに逆方向を向けて埋納した。
- E 2個の銅鐸は1号銅鐸を斜面下（北）方、2号銅鐸を斜面上（南）方に並べて配置して埋納した。

ただし、2個の銅鐸が正確に水平に配置されていたとは限らない。

なお、埋納状態から状態の変化、発見時までの状況を第55図にまとめて示す。



第55図 敷地1・2号銅鐸の埋納姿勢の復元

#### 4. まとめ

敷地銅鐸の埋納地（西の谷遺跡）は、敷地川流域の西側丘陵地に形成された谷の一つ、周囲の中では比較的深い谷の奥寄りに立地している。眺望は悪く、閉鎖的な空間にある（第51図）。また、この谷に集落や墓域形成はなく、銅鐸埋納だけの場所であったようである。こうした特徴は、全国に分布する銅鐸埋納地にも多く認められ、本稿であげた遠江の銅鐸出土地においても確認することができる。

その中でも、滝峯の谷は銅鐸埋納の谷としてよく知られており、各所で計6個もの銅鐸が発見されている（第47・48図）。比較的深い谷であり、銅鐸の多くは丘陵斜面の低い位置で出土している。また、谷部に当時の集落や墓域をみることはできず、関連する集落は谷開口部の岡の平遺跡などに求めなければならない。すなわち、複数の銅鐸が埋納された滝峯の谷と西の谷遺跡の谷について、閉塞感のある比較的深い谷の奥まった場所であり、集落域や墓域としての機能が与えられなかった場所であるという共通点を認めることができるのである。

埋納方法については、発掘調査による敷地3号銅鐸の情報に加えて、その調査成果を活用して不明点の多かった敷地1・2号銅鐸についても検討することができた。その結果、3個の敷地銅鐸全てが左右の鰭を上下にして横倒しに埋納された可能性が高いと判断した（第51・55図）。鰭を上下にする埋納方法については、先述したとおり、全国的に銅鐸を含む弥生青銅祭器の埋納事例に多く認められる。すなわち、弥生青銅祭器が分布する九州から東海、その最東端にある西の谷遺跡に至るまで、その扱い方と意識が共有されていたと判断することができる。

さらに、敷地1・2号銅鐸について、鈕を互い違いの方向に向けて並べて埋納した可能性を評価した（第55図）。複数埋納の場合、入れ子の状態や同一方向に向ける事例も多いが、互い違いの配置も島根県加茂町加茂岩倉遺跡や兵庫県宝塚市中山町、和歌山県日高町向山遺跡、愛知県豊川市伊奈遺跡といった類例をあげることができる（寺澤1992、勝部2001など）。少なくとも、敷地1・2号銅鐸の互い違いの配置が、本遺跡に留まらない銅鐸祭祀の文化の中で意識的になされた行為であることは否定できない。なお、互い違いの配置は銅剣・銅鉾など他の弥生青銅器の埋納にも多くみることができ、井上洋一氏は「九州から東海に及ぶ広い地域に共通した『祭式』の存在が窺える。それは各々の青銅器祭器のもつ呪術性に『祭式』の重要性が加味された『祭器』と『祭式』の融合とも言うべき現象の一端を具現化したものと言えよう」と述べている（井上2001）。

なお、筆者は滝峯の谷における銅鐸埋納方法について、敷地1・2号銅鐸と同じ方法で検討した（田村2003）。そして、敷地3号銅鐸は鈕内縁重弧紋のA面を斜面下方、鈕内縁鋸歯紋のB面を斜面上方に向けるが（第51図）、鈕内縁紋様がA B面で異なる前原銅鐸や穴ノ谷銅鐸においても、同じ指摘ができることを確認した。さらに、敷地1・2号銅鐸は「トリ」の絵のある1号銅鐸A面を斜面下方に向けるが（第55図）、「シカ」「トリ」の絵がある悪ヶ谷銅鐸においても、絵のある面を斜面下方に向けていた可能性が評価できるとした。

銅鐸の面については、祭祀のあり方と関連するA B面の区別があったとする指摘が既にある（木戸1994）。さらに、横にして埋納された銅鐸の方向などについて、銅鐸が自然界と人間界などといった二面（二元）性を意識して作られ、その機能と役割を期待されたという考えも示されている（寺澤1992・2001・2007）。こうした指摘を参考にするならば、銅鐸絵画は基本的に稲作との関連が指摘されており（佐原1982、春成1991、国立歴史民俗博物館1995）、埋納時にも農耕祭祀における機能・役割が意識されて斜面下方に向けられた可能性が考慮される。一方の鋸歯紋については、外から内の世界を守るという意味があるとされ、芝田文雄氏は七曲り2号銅鐸の一方の面の鈕内縁にある鋸歯紋について、神性の表現であると指摘している（芝田1982）。埋納時においても、外との関係における役割・機能を期待して鈕



内縁に鋸歯紋を持つような面を斜面上方に向けた可能性が考慮される。

本稿の検討は限定的な資料によるものであり、ここで得られた指摘の妥当性については、全国的かつ詳細な資料の検討によって確認する必要がある。しかし、敷地3号銅鐸の調査成果を得ることによって、これまで不明点が多かった敷地1・2号銅鐸の埋納方法について新たな検討を加えることができ、さらに、銅鐸埋納の方法とその意識について探る一つの方向性について言及することはできたと考える。銅鐸の発掘調査例は今なお数少なく、そこから得られる成果については、本稿のように多様に活用できるものとして高く評価したい。

## 参考文献

- 井上洋一 2001 「銅鐸研究における多角的視点とその成果」『銅鐸から描く弥生社会』予稿集 一宮市博物館  
 梅原末治 1927 『銅鐸の研究』 大岡山書店  
 大野延太郎 1912 「遠江引佐郡中川村悪ヶ谷発見の銅鐸に就いて」『人類学雑誌』28-9  
 岡崎 敬 1955 「銅剣・銅矛・銅戈」『日本考古学講座』4弥生文化 小学館  
 勝部 昭 2001 「大量埋納された出雲の青銅器」『銅鐸から描く弥生社会』予稿集 一宮市博物館  
 木戸雅寿 1994 「銅鐸のA面・B面について－神・巫・権力者・民のみた側－」『文化財学論集』  
 桑原久男 1995 「弥生時代における青銅器の副葬と埋納」『古墳文化とその伝統』 勉誠社  
 2001 「青銅器の副葬と埋納－ヨーロッパ青銅器時代と弥生時代－」『考古学研究』47-3  
 栗原雅也 1988 「静岡県引佐郡細江町穴ノ谷出土銅鐸」『考古学雑誌』73-4  
 2002 「都田川流域の銅鐸群に関する覚え書き」『銅鐸祭祀の終焉－近江と遠江』 野洲町立歴史民俗博物館  
 国立歴史民俗博物館 1995 『銅鐸の美』 毎日新聞社  
 佐原 真 1982 「三十四のキャンパス－連作四銅鐸の絵画の「文法」－」『考古学論考』 平凡社  
 静岡県 1992 『静岡県史』資料編3 考古三  
 静岡県教育委員会 1969 『引佐郡細江町中川地区銅鐸分布調査報告』  
 静岡県考古学会 2002 『静岡県における弥生時代集落の変遷』 資料集  
 芝田文雄 1982 「静岡県引佐郡細江町滝峯七曲り2号鐸」『考古学雑誌』68-1  
 島根県教育委員会・島根県埋蔵文化財調査センター・島根県古代文化センター 2002 『青銅器埋納地調査報告書Ⅰ（銅鐸編）』  
 進藤 武 1995 「近畿式銅鐸と三遠式銅鐸」『古代文化』47-10  
 2001 「近畿式銅鐸と三遠式銅鐸」『銅鐸から描く弥生社会』予稿集 一宮市博物館  
 田村隆太郎 2002 「敷地1・2号銅鐸埋納方法の復元」『研究紀要』9 静岡県埋蔵文化財調査研究所  
 2003 「滝峯の谷にみる銅鐸埋納と祭祀－銅鐸の出土状況・埋納姿勢の復元とその傾向－」『静岡県考古学研究』35  
 寺澤 薫 1992 「銅鐸埋納論」『古代文化』44-5・6  
 2001 「マツリの変貌－銅鐸から特殊器台へ－」『銅鐸から描く弥生社会』予稿集 一宮市博物館  
 2007 「銅鐸の二面性－その内なる二元的世界－」『考古学論攷』30 奈良県立橿原考古学研究所  
 豊岡村史編さん委員会 1995 『豊岡村史』資料編三（考古編）  
 浜松市文化協会 1990 『都田地区発掘調査報告書（下）』  
 春成秀爾 1991 「絵画から記号へ－弥生時代における農耕儀礼の盛衰－」『国立歴史民俗博物館研究報告』35  
 平野和男・向坂鋼二 1965 「静岡県引佐郡三ヶ日町猪久保出土の銅鐸について」『考古学雑誌』51-1  
 船越勇三郎・山崎常磐 1933 「遠江新発見の銅鐸」『考古学雑誌』23-4  
 細江町教育委員会 1991 『滝峯才四郎谷遺跡発掘調査報告書』  
 三木文雄 1955 「静岡県引佐郡分寸銅鐸」『日本考古学年報』3  
 向坂鋼二 1968 「静岡県引佐郡細江町中川不動平出土の銅鐸」『考古学集刊』4-2  
 2000 「県内発見銅鐸とその意義」『敷地西の谷遺跡出土銅鐸をめぐって』 静岡県埋蔵文化財調査研究所  
 野洲町立歴史民俗博物館 1996 『銅鐸－埋納と終焉を考える－』